Vol.138 市史編纂だより

わがまち歴史散歩

戦国期池田のまちから近世池田のまちへ

○天正兵乱後のまちの復興

広報いけだ4月号の記述でも確認してきたように、天正6（1578）年の兵乱で戦国期の池田のまちは、大打撃を受けました。荒木村重の軍勢に対し、信長方の武士が池田に進駐して、警備をしましたが、戦後池田氏の城は復興されずに放置されました。また、乱の勃発とともに商工業者の多くは難を避けて池田を去りました。一方、村重が伊丹に城を移してから多くの寺院は伊丹に移されたままでした。

ところが、その後、豊臣政権から徳川政権へと移り変わる二、三十年の間に池田は商工業を軸にまちとしてよみがえってきます。問題は、その復興は戦国期に形成されていた池田のまちと同じ構造・性格のまちの復興だったのかということですね。ちなみに戦国期池田のまちは、武家・寺社・商工業者等のそれぞれが相対的な権力者として、複合的に絡み合って構成されていたのではないかというのが6月号での仮説の提起でした。

○『新修池田市史』第2巻の記述

『新修池田市史』第2巻は近世の歴史を扱っています。そこでは、城址を考古学的に発掘調査した結果を踏まえてなされた第1巻の記述、すなわち「（町屋は）本質的に領主池田氏の存在に左右されるものではなかった」（第1巻677ページ）を踏まえ、「池田の町場は城とは関係なく在郷町（農村部に成立した商工業集落）として成立したもの」（160ページ）と評価しています。要するに「在郷町」という側面が一番大事だというのですね。

しかし、これでは戦国期には領主や強力な寺院・神社もあった池田のまちの多様な構造が、豊臣政権期から徳川政権期にかけて変化したことを見落とすおそれがあるのではないでしょうか。

例えば、伊居太神社は、かつての小権力者としてのその自立性の復活をめざすというよりも、豊臣秀頼の支配による復興を受け入れています（この跡は今も同神社が保存する擬宝珠に彫り込まれた文字にも示されています）。

また、商工業者については具体的な姿を語る史料が乏しいのですが、慶長19（1614）年大坂冬の陣のとき、奈良盆地と大阪平野を結ぶ暗峠に陣取った徳川家康のもとに池田村の庄屋らが見舞に酒樽を持参し、まちへの「禁制」と家康の朱印を貰ったといわれています。そのため、遅くとも17世紀初頭のころには商工業が復活し、業者らは大きな権力者の秩序に組み込まれることを受け入れていたのではないでしょうか。

▲現在の伊居太神社の擬宝珠

○広い視野に立った検討を

『新修池田市史』第2巻では「在郷町池田の成立は、池田周辺地域の農民たちが独立自営の農業経営者になったことを示す歴史的メモリアムでもあり、全国的にも農民自立が最も早くすすんだ地域の証明でもあった」とも述べています（162ページ）。

しかし、近世に先立つ中世～戦国期における近郊地域での農業的発展（農民の自立）や池田のまちとの関係は第1巻ではほとんど論じられていません。もし第2巻の記述の通りとするならば、中世荘園制の進行するなか、池田近郊の農業的発展の姿およびそれと池田のまち形成との関係を明らかにすべきでしょう。また、このことの持つ第一義的な重要性も示すべきでしょう。

近世初頭、池田のまちの復興といったとき、中世的まちの複合的構造の断絶ないし変革を見落とさず、また他面では周辺農村の経済的発展による在郷町的性格の形成とその継続を、史料を踏まえ具体的・統一的に把握することが大事ではないでしょうか。今後は、広い視野に立った検討、例えば伊丹など近隣他地域の事例も含めた史料調査と時代をこえた総合的な検討が必要になってくることでしょう。

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）

◆問い合わせは生涯学習推進課市史編纂☎754・6674

※『新修池田市史』『池田市史』史料編各巻1000円で販売中（別巻のみ500円）